

次に、昭和四十七年度から変更となった応援団について述べよう。

募集制では応援団員の人数を確保出来ず、「各HR、一名以上選出」という選出制に切り替わった。その名も「応援委員」となり、二十八人選出された。その年の四月下旬には、合宿練習も行うなど意気込んだが、なかには練習に参加しない委員もおるなど選出制でも問題はあったようだ。

さて、この四十七年は、五月十五日、沖縄復帰につき午後休業、七月十日は水害のため臨時休校となっている。また、従来は九月二十三日を「開校記念日」と定めていたが、「秋分の日」と同日であり記念する意味がないこと、創立四十周年記念式典は九月二十二日に舉行されたことなどを加味して、この四十七年から「創立記念日」の名称で記念することになり現在に至っている。

他には、能高祭の行事の一つとして、十月二日「劇団東京アンサンブル」による『奇跡の人』（ウィリアム・ギブスン作）の全校鑑賞会が催されている。

翌昭和四十八年四月一日からは、第十八代校長として阿部強大館桂高校長が就任。



第18代 阿部校長

この年度の四十九年一月二十六日、二月二日、二月十六日の三日間、大雪のため休校措置がとられた。

（神馬幸子・記）

第七章 新しき飛躍へ——高埕時代

高埕への 昭和四十九年は本校の歴史において一大転機を迎える画期的な年である。四月に着任したばかりの鎌田宏第十九代校長を中心に、秋には永年住みなれた樽子山から高埕への校舎移転という歴史的大事業が行われたからである。

十月二十八日、午後一時三十分から体育館で旧校舎惜別式が全校生徒や多数の同窓生を集めて催され、翌二十九日にはトラックに横断幕、プラスバンドを演奏して中和通りから高埕の新校舎までパレードが行われた。



第19代 鎌田校長

晴天のなか二十九、三十の両日にわたり全校生徒によって机、椅子等の備品が搬出され、大型トラックが何度も何度も往復した。トラックから荷をおろす生徒、その荷を各教室に運ぶ生徒、いずれも新しい校風の創造に



高埕新校舎に到着したパレード

晴天のなか二十九、三十の両日にわたり全校生徒によって机、椅子等の備品が搬出され、大型トラックが何度も何度も往復した。トラックから荷をおろす生徒、その荷を各教室に運ぶ生徒、いずれも新しい校風の創造に



吹雪の中を学校へ

燃えて力の限り作業に当たったのである。(なお十月九日には図書を中心とした運搬が一年生によって行われた。)十月三十一日、新装なった体育館で入舎式が行われ、十一月一日から平常通り授業が実施された。思えば、校舎改築の話がもちあがってから五年目、和田勝太郎(昭和四十五年四月一日〜四十八年三月三十一日)、阿部強(四十八年四月一日〜四十九年三月三十一日)、鎌田宏(四十九年四月一日〜五十年七月二十一日)と三代の校長の尽力によって、成しとげられた、能代高校にとって歴史的な大事業であった。

冬に向けての校舎移転であり、通学に関する諸問題、進路に与える影響など心配事が尽きなかった。実際、今日のようにパイパスも完成しておらず、勿論スクールバスも開通していない悪条件の下で、雨中のどろんこ道や、寒風吹きすさぶ吹雪の中を通学した。時には吹雪のため学校を通り越し、相染森方面へ行った者、横なぐりの風雪に飛ばされて田圃に落ちた女生徒もいた。

しかし、この悪条件にもかかわらず欠席、遅刻、早退する者は激減、大学受験でも例年のほぼ二倍、四十二名の国公立大学合格者を見た。

諸施設の 新校舎改築事業も第三期工事にはいる。五月十四日には体充実 育館建設に着手し、十一月一日に待望久しい体育館が完成した。新体育館は総工費約一億一千三百六十万円、総面積は一、五八〇・七〇㎡である。また第二期工事の一環として、前年から建設中の特別教室および管理棟(総工費約二億六千六百九十万円、総面積三、九八一・三〇㎡)が完工。さらに八月二十七日には陸上競技場(三〇〇mトラック、総工費約一千七百五十九万八千円)の造成工事に着手し、翌五十年三月三十一日、また、九月二十七日にはセミナーハウス(総工費約四千三百十九万円、総面積四九六・五八㎡)建設工事に着手、同じく翌五十年三月二十日にあいっいで完成した。

能高祭の この年の第十五回能高祭は、校舎移転という大事業を控える公開半日 ていたこともあり、九月二十日に準備、開会式、前夜祭を行い、一般市民への公開は翌二十一日の午後一時から四時までの半日だけで、体育館での芸能発表と野外デコレーションを中心に行われ、予算総額は三十七万五千円の小規模なたちでの実施にならざるをえなかった。

軟式野球 部活動では樽子山時代の最後を飾るかにように軟式野球全国初出場 部が初の全国大会(第十九回全国高校軟式野球選手権大会)出場権を獲得、大阪藤井寺球場に乗り込み、八月二十七日二回戦、甲信越代表の相川高校に五対〇で快勝したが、準々決勝は東京代表の江北高校に敗れ、惜しくもベスト4に進出はならなかった。

しかし茨城国体の出場権を獲得し、同年十月二回戦で強豪平安高校

と対戦、見事三対〇で完封、準決勝では北部九州代表の宇久高校と対戦、軟式野球史に残る延長十七回の死闘の果て、二対三で惜敗したが、不倒不屈の「能高魂」を全国に轟かせたのである。

格技場な 昭和五十年は創立五十周年記念の年であり、その記念式典とできる 間に合わせるべく、施設設備の拡充が着々と進められていった。六月二日には水泳プール建設工事が着工され、八月二十一日には二十五メートル六コースの立派な水泳プール（総工費約一千八百六十万円）が完成、また九月六日より格技場新築工事が着工され、十二月十八日に総工費約二千四百六十七万五千円、総面積三五六・二五平方メートルの現在の格技場ができあがったのである。

五十周年記念のための計画がすすむ中で、鎌田校長が能代市教育長に就任することになり、七月二十一日付で退任し、翌二十二日付で鷹巣高校長であった小林繁春第二十代校長が着任することになった。

創立五十 創立五十周年記念式典と新校舎落成式は十月三日に、盛大周年式典 かつ厳粛に挙行された。式典には全校生徒、来賓、同窓生など約千五百名が参列し、小林校長が「新築に尽力された県や地元市町村、校舎改築期成同盟会の方々に感謝を申し上げたい。生徒は新築を期に、古い伝統を引き継ぎ文武両道に励み、国や県の誇りとなる人材になってほしい」と式辞をのべ、長年本校発展につくしてきた功勞者に感謝状が贈呈され、永年勤続功勞者が表彰状を受けた。

記念事業としては、四十六年度から四十九年度までの卒業生の卒業記念として玄関の右となりの壁に大きな校章がとりつけられ、同窓生



創立五十周年記念式典

からは門柱が贈られた。また本校卒の画家である信太金昌氏からは日本画が贈られ、現在校長室に飾られている。さらに本校五十年の歩みや回想などを簡潔にまとめた『創立五十周年記念誌』が刊行された。

なお旧制十九期卒の小林肇氏の寄贈によって、校庭に全長八・七メートル

ルのブロンズ像が建てられた。これには鎌田前校長が、洪自誠の「菜根譚」の「身心何等自在」という詩の一節からとって「自在」の像と命名した。また同窓会でも『同窓会名簿』を編集・発行している。

硬式野球 昭和五十一年には硬式野球場が完成した。敷地面積が一六、四四五㎡、両翼が一〇〇m、中堅までが一二〇mもある広

い球場で、水はけをよくするため中堅から捕手間に幹線の集排水管を通してほかに、これに通ずる六本の集排水管を内外野に埋没。また、幅四〇m、高さ八・八mのバックネットも完備して、グラウンド状態や球場の広さは能代市営球場（現市民球場）をしのぐ球場となった。県は総工費三、四五〇万円七月十日から工事に着手、十月中旬までに

完成する予定であったが、本校では学校独自の予算で、高さ九〇cmのフェンスも設置することにした。

下宿生の この年に「下宿業者と父母の会」が、六月二十九日に開か
問題点 れたことも注目される。高校生の下宿生活ぶりが、生徒指導上に問題が多く、下宿業者、保護者、学校側の三者が集まって二時間にわたって話し合いがもたれた。下宿業者から学校、保護者への要望としては、一、下宿の方へ伺って貰いたい。二、小遣い金を余り多く持たせないでほしい。三、友人を余り多く下宿先へつれてきてほしくない。などである。学校側から業者、保護者への要望としては、一、電話等で連絡をとって貰いたい。二、生徒の監督等厳しくしてほしい。三、異性の友人の来訪については特に注意を願いたい。などである。

新校舎で初 七月九日、新校舎における初めての芸術教室が催された。
の芸術鑑賞 この様子を「巨濤」は、以下のように記している。「平井哲三郎の指揮のもと、東京佼成ウインドオーケストラの公演は大変素晴らしい内容で、近年の本校芸術教室の最高の催し物であったといえよう。この団体は本邦トップレベルの吹奏楽団であり、期待通りの好演で、吹奏楽の音色は勿論のこと、楽団員それぞれからにじみ出る音楽観は、かく在るべきと物語ったものといえる。特にワーグナー作曲の「エルザの大聖堂への行列」はppからffへ盛り上っていく息の長いフレーズを、音のくずれもなく見事に表現し、並居る諸君を引きずり込んでいたと思う。地方巡りの演奏にしては、この演奏は真面目で、いかにも

若人の集いといえるし、プロに徹した立派なものであった。」

四十キロ 九月三十日、恒例の四〇km強歩が雨天のため中止となり、**強歩中止** 生徒、父兄の中から「残念」の声がしきりに出た。中には、あきらめきれず、中止指令にもかかわらず四十kmの行程に挑戦した者もいた。なお一〇〇名以上の生徒が帰宅できず、セミナーハウスに泊した。

白樺の苗 九月二十一日、白樺の苗木一〇〇本を、校舎南側ブルサ木を植樹 イドに三年生の卒業記念として植樹した。この苗木の一部は、二ツ井宮林署勤務の同窓生一同の寄贈によるものである。

卒業式がく 例年三月一日に実施していた卒業式を、三月八日に行うり下がる ことにした。一日は国立大学一校の入学試験の準備のため、欠席する生徒が一〇〇人前後もあり、「三年間の高校生活の最後を飾る式としては寂しいし、全員参加して思い出多い卒業式に。」ということから、一週間繰り下げて実施することになった。

野球場等 昭和五十年十二月に完成した格技場と、五十年十月末完成**完成披露** した硬式野球場の完成披露が、昭和五十二年四月二十三日西村節朗能代市長初め、来賓五十人ほどが出席して体育館で行われた。披露に先立ち、格技場と硬式野球場で関係者によるお祓の儀式を行い、安全を祈願した。披露後、格技場では市内高校の柔、剣道部を招待して対抗試合が行われたほか、午後からは硬式野球場で日大山形高校を招き親善試合を行ったが、両校の選手たちは広い球場で伸び伸びとプレーしていた。試合は十九対三で本校が圧勝、球場には生徒を初め〇

Bも多数つめかけ、「高崎球児」に声援を送った。また、この日、前年に全県選抜野球大会（能代市招待野球）の優勝旗を新調したため、能代市野球協会から前々年の優勝校である本校に、古い優勝旗が永久寄贈された。七月十三日には硬式野球場フェンス、雨天練習場（七九五〇㎡）及び部室（四九・六九㎡）も完成。

環境整備された新球場で厳しい練習をした硬式野球部は公約通り、好投手高松直志を擁し、昭和三十八年以来二度目の甲子園出場を果たした。八月九日甲子園球場で高崎商業高校と対戦、十対二で惜しくも一回戦で敗退した。

講演と芸 昭和五十二年六月二十二日、財団法人一ツ橋文芸教育振興術教室 会の笠原一男氏による高校生のための文化講演会が、体育館で開かれた。演題は「日本人のこころ」で西洋文化の普及で、くすみがちな東洋文化を見直そうという内容のもので、一時間三十分にとったものであった。講演時間が長いにもかかわらず、笠原氏のユーモラスな話術と、その内容に熱心に聞き入る者が多く、有意義な講演であった。講演終了後、主催者側の集英社より、図書館に「漱石全集」十一冊が寄贈された。

恒例の芸術教室は、七月六日体育館で、劇団新人会により「島」が上演された。内容は、瀬戸内の広島県呉市に近いある島を舞台に、原爆の傷を背負いながらも、逞しく生きようとする人々の姿を、描いたものであった。

スクール 校舎、校地の整備が着々と進められて行く中で、バイパス

バス運行 も完成、移転四年目にして念願のスクールバスが十二月一日から運行された。東能代へ学校間はピストン運送で三往復、天理線二台、中和線二台、初日の利用者は約二六〇人。バス運行時間に伴って、始業時刻が



待望久しかったスクールバス開通

て、始業時刻が八時五十分となる。願ればスクールバス運行までの四年の歳月はイバラの道であった。秋北バスとの度重なる交渉、時には能代市長にも仲介をお願いした。十二月二日、雨天のためバス利用者は前日の倍にふくれあがり、中和線の延着により遅刻者が多数出た。利用者は天候に左右され、晴天時はごく少数、荒天時はとり残される者が多数出た。バスは三学期中運行された。

校長の人 昭和五十二年度末の人事異動で小林繁春校長が退職され、事異動 横手城南高校より第二十一代和賀義雄校長を迎える。「文

武両道」の備わった学校経営を行っていききたい」との抱負を持つておられたが、わずか三ヶ月足らずで病氣退職。六月十一日付で秋田県教育センター所長であった草薙幸太郎校長を迎えることになった。

地域懇談 郡部出身者を対象とする地区PTAは各地区で毎年実施され、生徒指導、進路指導等の面で、学校と父兄との意見交



第20代 小林校長



第21代 和賀校長



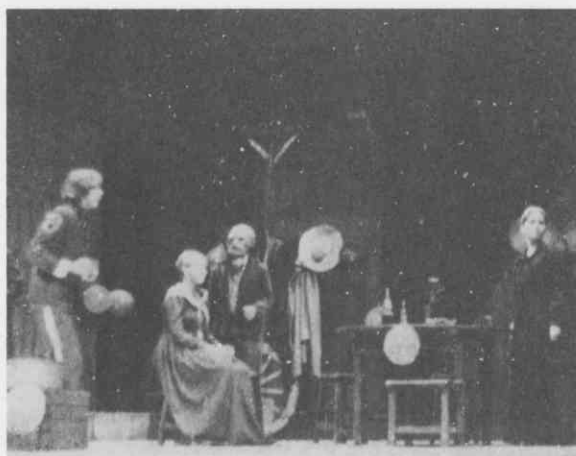
第22代 草彌校長

換の機会が持たれてきたが、能代市内出身者に関しては、学校に近いという理由で、PTAに相当する組織がなかった。しかし、昭和五十一、二年頃、市内出身の生徒にいろいろな問題が目立つようになり、生徒指導に関して学校、父兄が一致協力して指導すべきである、という気運がもり上ってきた。このようないきさつから、学校の生徒指導部とPTAの生徒指導部が中心になって、市内を十一のブロックに分け、主に生徒指導の面で、父兄との意見交換をすることを目的として、

昭和五十三年度から地域懇談会が発足し、今日に及んでいる。

能高祭一 昭和五十四年度から実施される共通一次試験対策の一環と学期に して、例年九月に実施されていた能高祭を二ヶ月余り早い七月一日、二日の両日に変更、秋田県内の秋田、横手など有力進学校も一学期実施に踏み切った。

演劇、硬式 五十三年八月三日、五日神戸市で開催された第二十四回野球活躍 全国高校演劇コンクールに初出場した本校演劇部は、ウォーレン・フロスト作「名もなき兵士」を演じ、見事に優秀校に選ばれた。また、硬式野球部は「甲子園出場は上部の至上命令だ」との



神戸市で熱演の演劇部

太田久監督の訓示にこたえ、見事に二年連続三回目の甲子園出場を果たした。右足を高々と上げる独得のフォームから快速球を投げる高松左腕投手を中心に投攻守三拍子揃った好チームであったが、八月十日一回戦で強豪箕島高校と対戦、惜しくも一対〇で敗退した。

共通一次 戦後初めての大学入試改革として登場した新制度は五十三年

はじまる 年十月一日～十六日が受け付け期間で、本校では現役一六三人、浪人六一人の計二二四人が願書を提出した。共通一次試験は五教科七科目、しかもマークシートという新しい方式によりコンピュータを導入して処理する全く新しい試みである。この後十二月中には志願状況が公表され、翌五十四年一月十三日、十四日には共通一次試験が行われ(県内は秋田大学)、三月四日から大学独自の二次試験、同月二十日までに合格者を発表するという手順であった。

テニスコート・校舎の施設、設備関係では、五十三年十一月十四日、軟式野球場完成 校舎改築期成同盟会が第二体育館建設計画について協議した。また、十一月十六日には四面のテニスコート(四三〇〇㎡、事業費一四八四万円)が完成、十月に着工した軟式野球部専用グラウンド造成工事も十二月末に完成した。土入れしたあと整地しただけで、体育後援会、軟式野球部OB組織の高嶋会などのバックアップを得、両翼八十五m、中堅九十mで硬式野球部専用グラウンドと隣り合せの形となった。事業費三五〇万円、昭和五十四年二月二十八日には中田建設等の寄付によりバックネットも完成した。同年四月二十九日午前十時、うす曇りの中テニスコートにおいて、日吉神社坂本宮司と、関係者により、テニスコートおよび軟式野球場のお祓の儀式を行い安全を祈願した。軟式庭球部は市内各高校、および二ツ井高校、また、軟式野球部は能代工業高校を招待、各々親善試合を挙行了した。

卒業記念 昭和五十三年年度の卒業記念事業として、中庭の整備が行われた。全面に高麗芝を張り、中央部に庭石三個を、そのま

わりにヒマラヤシーダーの木三本を配置してアクセントを付けたもので、生徒の気持ちを和ませ、憩いの場となった。



中庭の庭石とヒマラヤシーダー

翌五十四年には、セミナーハウスと教室棟の間に黒松、桜、つつじが植えられ、地面には野芝が張られた。

五十五年には卒業記念植樹も三年目を迎え、植樹時期を従来の秋から春に変更して、三年生に進級早々実施された。場所は教室棟と部室棟の間で、カラ松四十本程と高麗芝、更にはセミナーハウス裏にあった石をアクセントに置いて庭園風にした。費用は二十五万円であった。しかし、強風と土質が悪いこと、積雪等の悪条件のため枯死したものも多く、活着、順調に成育したものはわずかである。

研究紀要 優れた教育研究や実践の蓄積をもつ職員が多数いるにもかかわらず、研究紀要の発行に踏み切れずに来たが、昭和五十四年五月三十一日待望の第一集が発刊された。この第一集がきっかけとなって、校内に自主的な教育研究の機運がいつそう高まった。な



研究紀要第一集～四集および昭和六十年に発行された第五集

要はその後、昭和五十七年まで四回にわたって毎年発行された。

新生能高 能高祭は第二十回という記念の年でもあり、昭和五十四年

祭盛況 度は六月二十九日、三十日、七月一日と期間を三日間に拡大して、前夜祭の新設、後夜祭の充実など、大幅な改革が行われた。

前夜祭は盛りあがりを見せし、ルームデコ、壁新聞作りを通して生徒の結束はいやが上にも強固になり「新生能高祭」は大成を収めた。

能高祭前日の六月二十八日には体育館において恒例の芸術教室が開かれた。劇団「銅鑼（どら）」によりイソップ物語「狐とぶどう」が演じられ、演劇部が前年全国大会で優秀校に選ばれたこともあり、生徒の関心は強かった。内容はイソップの自由を求める姿を描きながら、真の自由とは、そして人間の尊厳とは何かを訴えたものであった。

軟式野球 昭和五十四年野球場開きのその年に、五年ぶり二回目の全部活躍

国大会出場をはたした軟式野球部は、大阪藤井寺球場で八

お、第一集は納谷喜代松（現能代農業高校）、高橋一成（現秋田高校）、熊谷公妙（現秋田中央高校）、武田正義（現能代高校）の四人の教諭が日頃の研究成果を寄稿された。研究紀

月二十五日～二十八日まで開催された第二十四回全国高校軟式野球選手権大会に出場。二回戦で前年度優勝校兵庫県飾磨工業高校と対戦、延長十二回一対〇のサヨナラ勝ち、準々決勝は新潟県相川高校に二対一延長十二回これまたサヨナラ勝ちをおさめ、準決勝は大阪府大鉄高校と対戦五対二、決勝戦に進出した。過去優勝一回、準優勝四回の実績をもつ静岡商業高校に無欲で対戦した本校は、延長十三回惜しくも四対二で敗退したものの、藤井寺球場に「能代旋風」をまきおこした。この後十月十四日からの宮崎国体に選抜されたが、二回戦で敗退した。

第二体育館完成 校舎整備の一環として、一学期に開始された第二体育館、渡り廊下、部室の工事が昭和五十四年十二月十九日完成した。（二部は翌年一月までずれ込む）第二体育館は総工費一億一千七十万円を要したが、県費のみでは負担し切れず、地元でもその一部三千七百八十七万を負担し、在校生は二千元を四回に亘って負担した。この体育館はバスケットコートなら一面、バレーコートなら二面ほどとれる広さで、すぐそばに卓球部および教科の器具室も新設された。また、鉄棒、肋木、つり縄もセットされ、部活動では体操部と卓球部が主に使用することになった。新設された部室はバレー、バスケット、山岳、スキー、軟式野球、陸上競技、サッカーの各部が割当てられた。昭和五十五年一月二十五日には落成式が挙行され、体操のオリンピック選手である梶山、平田の両選手が名演技を披露し、盛大な拍手を浴びた。

吹奏楽器 吹奏楽器が老朽化したため、その更新計画が打ち出された。

更新

計画によれば、五十五年度は六月から十一月まで月額二百円、十二月から翌年三月までは三百円を生徒一人の負担とし、五十六年度と五十七年度の二ケ年は月々二百円ずつを授業料と一緒に納入するという三ケ年計画で、総額七百七十六万六千円を捻出することによって全面的に楽器を更新するというものであり、昭和五十五年五月のPTA総会で承認され、実施の運びとなった。

指導法の 昭和五十三・五十四・五十五年度と三ケ年にわたって取り組み研究発表 組んできた学習指導法の研究もその成果を公開するため、

学習指導研究集録



公開研究協議会が県教育

委員会並びに全県下多数

の高校教員を集めて、昭

和五十五年十月八日本校

で行われた。研究テーマ

は「基礎的な力の定着を

めざす学習指導への試

みであり、国語、社会、

数学、理科、英語の五教

科がそれぞれサブテーマ

を設けて研究、実践し、その成果は高く評価された。

軟式野球 軟式野球部は、二年連続三回目の全国大会出場を果たし、

国体優勝 八月藤井寺球場にのり込んで、二回戦北部九州代表口加高

校と対戦、二対〇で勝ち準々決勝進出、天理高校に二対〇で敗れたが、

第三十五回秋季国体（栃の葉国体）に選拔され、昭和五十五年十月十

三日（十五日、栃木県真岡市で開催された国体では、初戦福島商に八

対〇、準決勝口加高に四対一で勝ち、決勝戦では宿敵静岡商に延長十

六回日没再試合寸前三点をもぎとり、宿願の全国制覇を果たした。

校友時報 校友時報発行三十年目に当り、縮刷版第二集が発行され

縮刷版

た。この縮刷版は五十四年に第四十号から第六十号まで

を第一集として発行し、大きな反響を呼んだため、それ以外の校友時

報についても是非発行してほしいと特にOBからの強い要望があり、

その要望に應える形で四十号以前および六十号以後の縮刷版を発行し

たものである。「……過ぎし日々を思い起こさせ、タイムマシンとなっ

て、一時を青春時代に引き戻す。そして、そのところに思いを馳せる。」

（巻頭言より）昭和五十五年六月の発行であった。

女子生徒 秋田県教育委員会は昭和五十五年十一月四日、昭和五十

大量合格 六年度公立高校入学希望者を発表した。これにより

従来の国語、英語、数学に理科、社会を加えた、初の新教科による学

力検査は翌五十六年三月十一日に実施され、同月十七日午前六時に合

格者が発表されることになった。検査時間は、従来の三教科五十分、

作文四十分から、国語を除く四教科は四十五分に短縮、国語は作文力

をみるため五十五分とした。

五十六年三月十七日発表された高校入試合格発表によると、総志願

者三三九人のうち女子生徒は八十八人で、女子全員が合格を認められ

た。これは新制高校になって以来最高の大量入学であり、また女子生

徒に対する指導の重要性がますます高まることになった。昭和二十六年から男女共学の普通高校となり、女子生徒にも門戸を解放したが、当時は数えるほどだった女子生徒が徐々に増え、この年四十九名が卒業したほか、在校生の内訳も二年生五十九人、一年生四十九人と、ほぼ一クラス編成できる人数となった。そのシワ寄せは男子の受験者におよび、募集定員（二九四人）を四十人も上回って水増し入学を認めたにもかかわらず、五人の男子生徒が不合格の悲運に泣いた。

体育館に 昭和五十六年二月、体育館表面右側の壁に山田顕一氏（旧校歌掲額 制十一期生、旧職員）の揮毫による校歌の掲額が行われ、伝統ある我が校歌を更に尊び歌って行こうとする愛校意識の象徴が、また一つ加えられた。「自在の像」寄贈者の小林肇氏（旧制十九期生）の寄贈であった。

「早春譜」 校舎、校地の整備計画も着々と進められ、高墙へ移転し寄贈さる た七年目の春、すなわち、昭和五十六年度末定期異動によって草薨幸太郎校長は秋田工業高校長に転出した。そして、第二十三代校長として渡辺敏雄校長を秋



第23代 渡辺校長

田養護学校から迎えることになった。

五月には、管理棟東側階段踊り場に「早春譜」（絵画）が掲げられ

た。これは小川浩平氏の寄贈されたものであるが、小川氏の二男が昭和五十三年本校を卒業。東北大に入学してまもなく、交通事故にあっ

てなくなられた。その三回忌にあたり、子息の供養のためにも、と世話になった本校に十万円を寄付され、「広く生徒の目にふれるものを」との希望から絵画に決定した。制作は地元在住の画家宮腰喜久治氏によるものである。

女子出発 第二十二回能高祭は演劇教室を間にはさみ、五十六年六二時に 月二十五日～二十八日の四日間にあつて実施された。

六月二十五日前夜祭。プラスバンドのオープニングのあと恒例のクラス対抗のど自慢が行われ、前夜祭を盛り上げた。翌二十六日は文化後援会事業として、演劇教室が行われ、前々年に引き続き、劇団「銅鑼」による「禁じられた遊戯」を鑑賞した。ナチス・ドイツによって虐殺されたユダヤ人の生き方を描いた劇で、大きな感動と反響をよんだ。また、九月六日には恒例の四〇KM強歩が実施され、従来の女子生徒の森岳スタートが、一時三十分から二時に変更され、体育館での開会式に出席、男子生徒の零時出発を見送った後、森岳へバスで輸送されることになった。

女子テニス、十月七日、「女子テニス同好会の部への昇格」について、部に昇格 臨時生徒総会が開かれ満場一致の承認を得て「女子テニス部」が誕生した。昇格の主な理由は①練習、合宿等、日常の活動面は男子庭球部と同等、差異はなく一応の成果もあげてきた。②個人負担が大きく、そのため入部者が少ない。等であった。

屋内練習 十一月には硬式野球部専用の屋内練習場が完成した。も場完成 ともと雨天ピッチング場だったところに、百八十万円の

費用をかけて改造したものである。この設備は県内でも五指に入る設備で、グラウンドと同じ土が敷かれ、十二人三人はゆつくり練習できるスペースがあり、ストロブ二台、Tバッティング用のネットも張られ、照明灯も完備、夜間練習も可能になった。

新ステッカ 昭和五十七年度から自転車のステッカーのデザインが変更に變更り、一年生は赤、二年生は緑、三年生は青と学年ごとに色わけ、通し番号がつけられた。従来のステッカーは材質が悪く、しかも小さくてはがれやすく、番号もついていなかった。そのため紛失しても能代高校の自転車ということしかわからず、付近の住民や東能代駅からの苦情が絶えなかったので学校側では、その対応と自転車の処分に苦慮して来た。新ステッカーは蛍光であるため夜間走行も安全であり、許可証番号、登録番号もあるので、盗難防止にも役立つことになる。

また、女子生徒の急増に伴い、女子トイレの増設がさげばれて来たが、県費三百五十三万円をかけて、ようやく四月二十二日各階に完成。これまでの不便は解消された。また、四月二十三日には、三年生全員と二年生の一部の下足ロッカーが新品に取り替えられた。従来のものは、棚が低く雨の日には長ぐつが中に入らないため、その上部に置くことが多く、見た目に悪いだけでなく、紛失や間違いのトラブルが憂慮されて来た。その対策として、大きいロッカーに取り替えられたのである。なお、一、二年生については次年度以降、順次新調することになった。



念願の全国制覇を果たし、よろこびの胸上げ

三、宿願の全国制覇を達成した。時に昭和五十七年八月三十日であった。

また、六月四日から五日間、青森県営球場で開催された、第二十九回春季東北地区野球大会において、硬式野球部は一、二回戦、準決勝と順調に勝ち進み、決勝では岩手県代表の久慈工業高校と対戦。六対二で快勝。十八年ぶり二度目の優勝を飾った。

樽子山に青 旧能代高校跡地は、昭和四十九年高埴移転後、能代市文春碑 会館、青少年ホームなどが建ち並び、すっかり昔の面

遂に念願の 会場をこ
全国制覇 れまでの
大阪藤井寺球場から明
石公園球場へ移して二
年目、第二十七回全国
高校軟式野球選手権大
会に軟式野球部は四年
連続五回目の出場をは
たした。二回戦村野工
二対一(延長十二回)、
準々決勝宇都宮学園三
対一、準決勝、札幌商
十対三、決勝は玉野高
校に延長十三回四対



樽子山校舍跡地に建立された「青春碑」

福島県産の花崗岩、鮫川石を使い、表面には佐々木満参議院議員の筆による「青春」の題字、裏面は大理石のプレートに卒業者数、校章が記された石碑を建立した。建立地は松寿園入口に残る松林の一角で、昭和五十七年九月二十三日の創立記念日に完成、同二十五日同窓会総会に先立って除幕式が挙行された。

なお、この年新教育課程移行に伴い、教育課程の内容が大幅に変更され、一年生の必修科目の中に「国語Ⅰ」「現代社会」「理科Ⅰ」等が設置されたほか、各科目の名称も変った。また、選択科目が大幅に増加した。これは高校進学率の上昇と、それに伴う多様化に対応することが目的であり、「ゆとりと充実」した教育を目指すためであった。本校の教育課程も大幅に変更された。

影も姿を消したため、終戦前後の混乱期に学んだ旧制十九期生らを中心に「多感な少年時代を過した思い出深い学び舎の地を、何らかの形で後世に伝えることはできないか」という声が高まり、同窓会は記念碑の建立を決定。総事業費約百二十万円、高さ（台座を含めて）二・六m、幅一・八m。



第24代 平野校長

また、毎年二月初めに実施されてきた、学校の伝統行事である予餞会が、マンネリ化、送られる三年生の出席不足（五十人足らず）、マナーの悪さ等、盛り上りに欠けることが指摘されてきたが、予餞会の意義やあり方を生徒会執行部が問題化し、「自主的に予餞会実施の気運がもりあがるまで中止することに決定。」職員会議でもこれを承認した。その後、五十八年度以降も、予餞会を復活させようとする兆しが、生徒の間に現れず、現在では完全に、消滅してしまったかの観がある。

日本海中 渡辺敏雄校長が

部地震 退職され、昭和



天井・壁・床に今なお地震のつめ跡が残る校舎

えた。創立五十八年目に於いて初めての同窓生校長である。

五十八年五月二十六

日午後零時零分一八秒、能代沖に大地震が発生した。M7・七震度五の強震で、通説を覆す大津波も発生し、秋田県内は大被害を受けた。

能代市山本郡内でも五十六名の死者を出し、家屋の倒壊や道路決壊等が相次ぎ、上水道、ガスもストップ、市民生活がマヒ状態に陥り、稀有の大惨事となった。本校はちょうど中間テスト三日目、生徒は放課後でほとんど校内にはいなかったが、その揺れは縦にも横にもひどく、ロッカーが倒れ、湯呑茶碗がわれるというすさまじい状態であった。特に理科室の被害がひどかった他、校舎のあちこちに亀裂が入った。中間テスト最終日はとりあえず次週に延期することにした。

PTA全 八月二十六日、神奈川県平塚市で開催された全国高P連国表彰 神奈川大会において、地域の教育環境の浄化と青少年健全育成に尽力した功績で、本校PTAが団体表彰された。また、PTA活動の活性化、地域環境の浄化、さらに県連役員としてPTA運営と発展に尽力された渡辺英一郎前PTA会長も個人表彰された。

バス全廃から昭和五十二年から六年間能高生の足として、東能代・冬季運行へ 理・中和線と運行されて来たスクールバスが、四月末で全面廃止となった。秋北バスでは利用客が不安定で、特に夏季や晴天時の利用者はきわめて少なく採算がとれない、というのが最大の理由であった。その後、バス会社と粘り強い交渉を重ね、十一月十八日より再運行にこぎつけたが、収入の安定化のため、定期券購入者のみを乗車させるという、いわゆる予約制乗車となった。しかも通年運行は不可能であり、冬季の運行についても、その年々で交渉し、取り決めるということになった。

昭和五十九年も冬を迎えるに当って気懸かりなことはスクールバス

の運行であった。夏季の間運休していたが、数次にわたる会社側との交渉の結果、前年同様十一月十八日から三路線共に運行を再開するこ

昭和58年11月8日(火曜日)

能代高に一学級臨時増設

定時制 能代北廃止、能代工に普通科

来年度の募集人員を発表

森林浴楽しみ全員完走

砂防林で健康マラソン大会

男子

一学級臨時増設決定の北羽新報紙面

とになり、陸の孤島を免れることができた。

一学級臨時増設 秋田県教育委員会は昭和五十八年十一月七日、五十九年度の公立高校入学希望者を発表した。それによると、

本校の募集人員は三百六十人となり、単年度の一学級臨時増設が決定した。

昭和五十九年四月六日単年度一学級臨時増設により、八学級、三七一人の入学が許可された。そのため書道室を改造して教室に当てた。また、三年次コース選択については、エレクトロニクス時代を反映したのか理科コース希望者が多く、昭和四十九年以来十年ぶりに理系三クラス、文系四クラスとなった。

五九イン 昭和五十九年度より、三ヶ年にわたり、能代市山本郡地

ター開催 区は秋田県教育委員会から「生徒指導研究推進地域」に

指定された。この研究の目的は「……中学校及び高等学校の指導体制を整備し、関係機関・団体等の協力を得ながら、継続的、広域的、総合的に生徒指導を進めるその望ましい在り方を実践的に研究する。」ことであつた。本校は本研究期間中、事務局を担当することになっている。

昭和五十九年八月秋田県全域で全国高校総体（インターハイ）が開催され、「東北の緑にそまれ、君の青春」のスローガンのもと、全国各地から若人が続々と県内にやってきた。能代山本地区でも男子ソフトボール、相撲、フェンシングの三競技が開催され全生徒一人一役を合言葉に能代山本ブロック生徒推進委員会が運営、接待等に活躍した。体操競技に出場した館岡潤は床運動で見事に銀メダルを獲得、気をはいた。体操部の他、軟式庭球部も二瓶、小玉組が出場した。

甲子園大会秋田県予選において、硬式野球部は「能代旋風」をまきおこし、代表決定戦まで進出した。全国高校総体のため例年より日程が大幅に繰り上げられた七月二十二日、八橋球場での相手は金足農業高校で六回には五対三とリードした本校が、九回表一死から逆転され五対六で涙をのんだ。その結果硬軟両野球部揃っての全国大会出場が期待されていたがその夢ははたせなかった。軟式野球部は六年連続七回目の全国大会出場をはたし、準決勝で広島県の広陵高校に三対〇で惜敗した。

三田元悦 九月二日午前零時出発予定の伝統行事である四十KM強

校長就任 歩は降雨のため九月一日十九時中止と決定。一週間延期されて九月九日実施され、湿度の高い天候に影響されたためか、参加者八七七人中、男子二十九人の途中棄権者をみた。なお、女子二三人は完歩した。



創立六十周年記念事業で植樹された前庭の松

平野清太郎校長は能代市教育長就任のため、年度半ばの九月三十日付けで退職され、十月一日付けで三田元悦秋田県教育庁主幹を第二十五代校長として迎えた。同窓生としては二代目の校長が誕生したのである。

教育振興 昭和六十年四月
会発足 月二十六日本

体育後援会、文化後援会並びに教育振興会設立総会が開催された。教育振興会の目的は本校の長期的展望に立った教育環境の整備、および人間性豊かで個性的な生徒の育成に寄与することであり、この目的を達成するため①学校施設、設備の整備・充実②学校運営に対する財政的助成③その他この会の目的達成に必要な事業を推進すること、となっ

ている。初代会長には塚本義夫校舎改築期成同盟会会長が選出された。やがて、五月二十二日には過去幾多の事業を完遂し、その任務を完了した校舎改築期成同盟会が最終総会をプラザ都で開催し、静かに消えて行ったのである。思えばその設立は昭和四十五年十一月五日、十五年の歳月をかけて実施された数々の事業は、今、高塙の校舎、校地に全て刻まれている。教育振興会の発足に伴って、まっ先に盛り込まれたのが植樹計画である。創立六十周年記念事業の一環として前庭を中心に黒松の大木六十本、陸上競技場外縁に黒松（樹高約一・五mのもの）二、一五〇本が移植され、校舎移転当時の高塙の原頭も着々と緑化が進み、やがて高塙が松陵に生れ変わる時は間近い。

創立六十周年記念 昨年から検討されていた機械警備（学校無人化）導入が定し、去る七月二日実施の運びとなった。創立以来、人間のたえることのない学校に、今は夜間及び日曜、祝祭日等、人間が一人も居ないという時間的空間が生じたのである。

創立六十周年に花を添えるかのように、六月初旬に実施された全県高校総合体育大会では陸上競技部を始め各種目で活躍、特に体操部は団体で十連覇という輝かしい記録をつかった。八月石川県で開催された全国総体（インターハイ）には陸上競技部、体操部が出場し体操部は十八年ぶりで団体六位に入賞し個人では床運動で館岡潤が銅メダルを獲得した。また、軟式野球部も七年連続八回目の全国大会出場権を獲得、八月二十五日～二十九日明石公園球場での大会では準決勝に進

出したが惜しくも県立岐阜商業高校に二対〇で敗れたが、10月20日の開催の「わかとり国体」に選出された。早稲田カラーを取り入れた応援団はスピーディー、軽快、かつ躍動的な応援で各方面から好評を博した。

刊行されて来たが、諸般の事情から五十八年・五十九年と休刊。本年は創立六十周年に当たり、再び発刊の声が高まり、八月二十七日に第五集が刊行された。

樽子山から高塙に移転して早や十一年目、本年は学校創立六十周年を迎えた。今や卒業生一万二千有余人、日本の、いや世界の政界、財界、官界、教育界その他各界で活躍する幾多の俊英を輩出して来た本校も、高塙の地に深く、そして広く根をおろし、来るべき二十一世紀に向けて一層の飛翔を期している。いざはばたけ「高塙健児」。

（小玉徳征・記）